



繚繚令（こうけつ・りょう）、ステップス二年ぶり二度目の個展である。繚繚は前回、パネルにカラーージュの作品を展示したが、今回は半立体的な作品を画廊内に7点飾り、事務所に小品の平面を8点、展示した。

小品に目を向けると、これが一人の作家による作品かと疑いたくなるほどそれぞれに異なる表情を浮べている。作家としてのスタイルが形成されていないというよりも、これが繚繚の多様さであると認識したい。

それは半立体的な作品にも表れている。立体的でありながらも絵画に拘っているようでもない。彫刻やインスタレーションとも違う。コンセプトを強調する80年代的な現代美術でも、「反芸術」を意識する60年代の前衛芸術にも当て嵌まらない。

子供の工作よりも緻密でありながら「美術」という枠に押し込めずに、自由に発想しているのがいい。造形、概念、技巧を無視せずに己が出来ることをしている。

何者にも定義し得ない作品を制作するのが、現代美術である。繚繚は、その鉄則を自覚なくとも行っていることに喜びがある。

当然、各作品に目を投げると、ポップアートの思考を感じさせる。確かに日本にも70年代にポップアートは「輸入」された。ポップアート「的」作品が量産されたが、単なる外面の模倣に過ぎなかった。

かといって、繚繚の作品がポップアートの本質についているということでもない。むしろ70年代のポップアートの思考と、最も遠く隔たっているとも感じられる。それは大量生産を否定していない点に代表される。

それでも繚繚のポップアートの思考とは、日常を日常で超えることにある。自由な制作を続けて欲しい。

